

■ フォトエッセイ ■

# チベット奥地、 シャングリラの谷に 住む少数民族

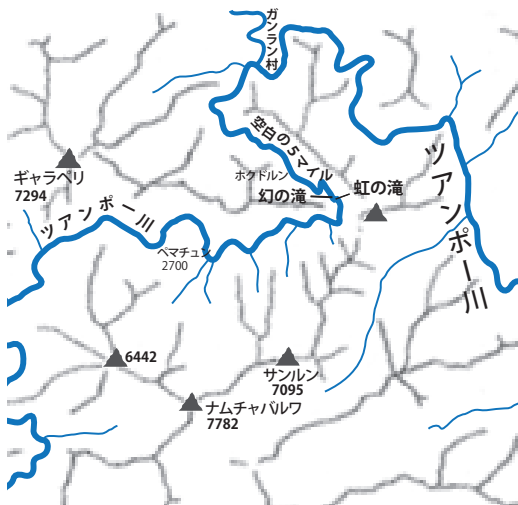
写真・文 角幡 唯介  
Yusuke Kakuhata



彼と出会った時のことは、今も強い思い出として深く心に刻み込まれている。

天井から豚の腸詰が所狭しとぶら下がるチベットの小さな山奥の民家に、私はその時泊っていた。二〇〇二年二月のことだ。当時チベット語を話せなかった私は、その家の主人や老婆、若い息子や娘たちと笑顔だけで会話をしていた。すると彼は突然、むしろ家族よりも偉そうな態度で、その家にやって来たのだ。





ツアンポー峡谷に住むモンパ族のショワン



ツアンポー峡谷にはいくつかの滝があり、昔の探検家はこの峡谷で滝探しに熱中した

鋭くて細い目、しっかりとした太い眉、悪だくみを隠したみたいな含みを持たせた笑い、何週間もほったらかしにしたようなもじゃもじゃの頭。野武士のような強い印象を人に与えるその男は、汚れた迷彩服を着て、いくつもの数珠を首からぶら下げていた。

名前を尋ねるとショワンだと名乗った。ショワンは少し中国語を話せ、私も少し中国語を話せた。その日から彼と私は、きっかけは金銭を結びつきとしたものだったのかもしれないが、それでも友達といえる関係になった。中国チベット自治区の中心都市ラサから東に約五〇〇キロ、中印国境近くのヒマラヤ山脈にツアンポー峡谷という深い谷が刻まれている。そのガンランという村に彼は住んでいた。私はその時、深さ、長さ、水量などから世界最大といわれるこの大峡谷の地理的な空白部を、たった一人で探検しようとしていた。

ショワンに話すと、彼は私のその計画を嘲笑った。「ツアンポー峡谷を一人で探検する？ 馬鹿な、やめておけ。道もないし、地元の間人だつて行ったことがないんだ。死ぬかもしれないぞ」

「大丈夫さ」と私は言った。「日本で登山をしているから大丈夫さ」

結果は彼の言った通りになった。私は彼の言うことを聞かず、一人で峡谷の中に入り込み、滑落して死に損な

い、巨大な岩壁に行く手をさえぎられ、最後は進むことができなくなり、出発から八日後、のこのこと彼の家に戻って来たのだ。

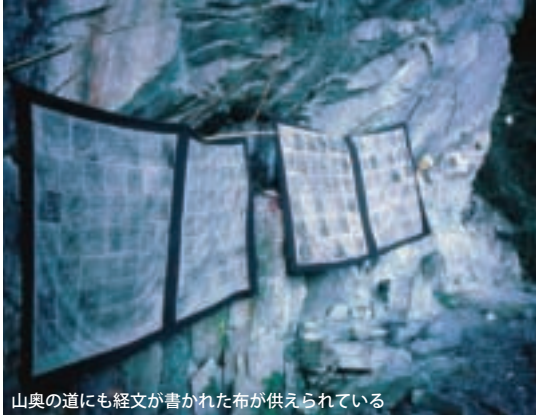
でも、そんな私を彼はあたたかく迎えてくれた。だから言ったのだらう、ツアンポー峡谷を踏破することなどできないのだ。そう言つて彼は笑った。

その日から私は彼の家の居候になった。彼は体の大きな妻と幼い二人の息子との四人暮らしだった。家は高床式の木造建築で、床下には鶏や豚などの家畜が飼われていた。妻は私のためにツアンパやチャパティに豚の背脂などをおかずにした食事をいつもふるまってくれた。ショワンは昼間から酒を飲み、酔っ払って歌をうたい、そして私の手を取り、さあ、踊ろうといつも言った。

ツアンポー峡谷にはモンパ族というチベットの少数民族が多く住んでいた。ショワンもモンパ族だった。モンパ族はもともとプータンのあたりに住んでいたが、一九



ツアンポー峡谷の渡し船



山奥の道にも経文が書かれた布が供えられている



チベという村で出会った女性

世紀初め、はるか東に位置するツアンポー峡谷に移住してきたと伝えられている。彼らが移住してきたのは、チベット仏教に伝わる言い伝えを信じたからだ。ツアンポー峡谷には、ジェームズ・ヒルトンの小説「失われた地平線」の中で描かれているシャングリラのような理想郷伝説があるのだ。小川が流れ、瞑想に適した洞窟があり、木には肉がぶら下がり、穀物は勝手に育ち、不老長寿の命を手にすることができる。昔の偉大なヨガ行者がツアンポー峡谷のどこかに隠したといわれている。その理想郷伝説を信じ、モンパ族たちは二〇〇年ほど前にブータンからツアンポー峡谷に住み着いたという。

シヨワンはそんなロマンティストたちの子孫だった。敬虔なチベット仏教徒である彼らは、村の近くにある聖地を巡礼し、チオルテンと呼ばれる洋ナシ型の仏塔を建て、ラマ僧の家に集まっては祈りを捧げていた。峠や川の合流点にはダルシンと呼ばれる経文が書き込まれた白地の旗が風にたなびいていた。風にのり仏法が世界にあまねく広がるように。そういう願いが込められたものだ。

シヨワンの家に寝泊まりしながら、私はその後も何度か彼を伴いツアンポー峡谷の奥深くへと向かった。そして峡谷の最も奥深いところに一人で行った時、川沿いの岩壁に巨大な洞穴があるのを見つけた。その洞穴の上に



峡谷の奥深くのホクドルンとよばれるところに、理想郷伝説を思わせる巨大な洞穴があった

は広い台地が開けていて、険しい峡谷が続いてきたそれまでとは明らかに異なる風景が目前に現れた。それを見た瞬間、私はツアンポー峡谷のどこかにあるといわれる理想郷伝説のことを思い出した。モンパ族の探してきた理想郷はきつとここではないのだろうか。

村に戻ってそのことをシヨワンに伝えた。

「そんな洞穴があるなんて知らないな」

「近くには滝もあったよ」

「そんなところに滝？ 聞いたことがない」と彼は言った。「それが本当なら、その滝のことを知っているのはお前だけだ。お前だけが知っている滝だ」

それから七年後の二〇〇九年二月、私は再びツアン

北海道芦別市出身。早稲田大学卒。朝日新聞記者を経て、現在は冒険や登山を中心としたノンフィクションライター。チベット・ツアンポー峡谷を単独で二回探検した他、ニューギニア島探検、ヒマラヤ雪男捜索隊などにも参加。著書に黒部川のダム問題を扱った「川の吐息、海のため息」（桂書房）



峡谷のすぐ横にそびえるギャラペリ（7,294メートル）

ポー峡谷を旅した。今度はシヨワンの住むガンラン村ではなく、そこから約六〇キロも上流にある別の村を出発して、ツアンポー峡谷の無人地帯をすべて探検するつもりだった。

過去の探検家が誰も成功しなかった困難なルートを踏査し、最後はガンラン村にたどり着く。そしてシヨワンの家のドアをたたき、彼と久しぶりに再会の抱擁を交わす。それが出発する前に描いていた旅の最後のシーンだった。そのシーンを実現するために、私はシヨワンと彼の妻、二人の子供がうつった写真をザツクの中に大事にしまっていた。

しかし今回の旅は困難を極めた。一人でいくつもの急峻な尾根を登り、谷をわたり、崖を下り、雪の峠を越え、そして二〇日が経った時、もはや私にはガンランに向かうだけの食料は残っていなかった。二四日目にようやく、命からがらガンランよりもたいぶ下流にある別の村にたどり着いた。結局、私は一番楽しみにしていたシヨワンとの再会を果たすことができずに旅を終えたのだ。

今でも時々思う。彼は元気に暮らしているのだろうか。自慢の火縄銃を肩からぶら下げ、森の中を歩き回っているのだろうか。

シヨワンと家族をうつした写真は今も私の机の上にある。この写真をいつか彼に手渡す日は来るのだろうか。



シヨワンの二人の幼い息子